

長谷部 浩(美術学部先端表現)

『演出術』

自著のなかから一冊を選べといわれて、「聞き書き」の仕事をおけるのは奇妙に思えるかも知れない。演出家蜷川幸雄との共著『演出術』は、おのれをいかに消し去るかに苦心した本である。二年半かけて稽古場に通り、稽古の前や後の時間を盗むようにして、話を聞いた。世界の第一線で活躍する演出家の代表作について、演出技法の細部とその背景について執拗に質問を重ねた。

批評家である私は、稽古場で集中する俳優やスタッフにとって邪魔者ではない。いわば「招かれざる客」として、気配を消しているのは、決してゆかいな体験ではなかった。それにもかかわらず、この仕事をなしとげることができたとすれば、蜷川幸雄さんの毒舌の暖かさだろう。「また、来たのか」と、いいつつも、つねに笑顔で迎えてくれた。

私のキャリアを育んでくれた演劇界に、ささやかな恩返しができる、今ほっとした気分である。

(2002年11月 教官アーカイヴ展に寄せて)